



板四小と板五中 心ゆたかな学びのエリア 令和8年度

学校の窓 6月号

板橋区立板橋第四小学校

HP <http://www.ita.ed.jp/edu/ita4es/>

e-mail ita4es@ita.ed.jp

マイノリティの幸せ

校長 堀内 祐子

連休明けの5月8日に東京都教育委員会主催の「人権教育研究協議会」という研修に参加してきました。講師は、株式会社ニューキャンパス代表 杉山 文野さんです。

ご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、杉山さんはトランスジェンダーとしての自身の経験をオープンにしながら、多様性を認め合う社会づくりに向けて多方面で活躍されています。私は2020年に放送されたNHKの『カラフルファミリー ～愛のカタチは、ひとつじゃない～』という特集番組で杉山さんの存在を知りました。番組は、トランスジェンダー男性である杉山さんと、そのパートナーの女性、そして精子提供者であり親友のゲイの男性、この「3人で親になる」という新しい育児のスタイルに密着したものでした。

「人権教育研究協議会」では「クラスに一人は必ずいる！？ セクシュアル・マイノリティの子どもたち」という演題で、女子校時代にセーラー服を着て過ごした苦悩や、心と体の不一致に悩んだ時期の体験、バックパッカーとして世界50カ国以上を旅し、南極まで行っても「自分からは逃げられない」と悟り、「ありのまま」の自分で生きる決意をした話、LGBTQ+（性的マイノリティ）の方々が国内や海外でおかれている状況などが、非常に明るくポジティブなトーンで語られていました。

講演の中で印象に残った話はたくさんあるのですが、特に印象に残ったのは、「生徒から性的マイノリティであることをカミングアウトされたとき、その保護者の対応に苦慮している。」という質問者に対する回答でした。その回答の中で「親が我が子の性的マイノリティをなかなか認められないのは、その子の未来が幸せにならないと考えているからであり、マジョリティ（多数派）を前提に作られた社会の仕組みや価値観で幸せを捉えているからだ。」「したがって、性的マイノリティの問題は、単なる『個人の悩み』や『特定のグループだけの問題』ではなく、社会全体が抱える構造的な問題である。」という話がありました。つまり、LGBTQ+の方々が「ありのまま」でいられないことは、個人の責任でなく社会の責任である、ということです。

LGBTQ+に該当する人の割合については、日本の最新の調査では約10人に1人（約9%～10%）とも言われています。その割合で考えると、本校の児童は500人弱ですので、50人弱の子どもが性的マイノリティの可能性があります。別の調査では、性同一性障害の人が「性別違和感を自覚し始めた時期」について、小学校入学前までが56.6%、小学校低学年が13.5%、小学校高学年が9.9%と答え、80%が小学生のうちに自覚すると答えています。「自分の周りにはいない」と感じていても、その人が存在しないのではなく、「言える環境ではない」だけなのかもしれません。そして、すでに、本校でも人知れず辛い思いをしている子どもがいるかもしれないのです。

また、マイノリティは性的なものだけではありません。「障がい者」「外国人」「宗教的マイノリティ」など様々です。これらの人々が「ありのまま」でいられる「幸せ」を享受できる社会の、一刻も早い実現を願わずにはられません。そして、その社会の実現のために学校教育が果たすべき役割は何か、しっかりと考えていきたいと思えます。

最後に、人知れず悩んでいるマイノリティの人に、杉山さんの著書「ダブルハピネス」から次の言葉を贈ります。

「マイノリティとして生きることは、確かに壁が多くて大変（辛さが2倍）かもしれない。けれど、その壁を乗り越える過程で出会う人や、普通なら気付かなかった視点に気付くことは、楽しさや喜びも2倍（ダブルハピネス）にしてくれる。」